

るの敏なるに驚く、所謂當時書肆か音楽書の出版を以て、難物の一に置きたりしに、獨り四竈氏の出版書に至ては、少くも四五版に至らざるなしと聞く、是れ氏の慧眼ならすして何ぞ、氏の音楽界に跋渉する地位、近日朗々の音にて歓迎せられん、今述へし所は上眞行一己の愚見のみ、敢て問に答へて音楽の爲めに心底の一斑を吐露するのみ、請ふ笑察あれと、時に粹士明治廿五年十二月某日月光に導かれ、牛込矢來町廿三番地を立出たり。

奥好義(おくよしいさ) 式部職樂師兼伶人、東京府士族、旧樂人

安政五年(一八五八)九月二十日。京都塔之段毘沙門町に於て生。

明治二年(一八六九)七月二十七日百官受領被廢に付各位階を禰。但し上の禰自四位初位に至迄被廢。

同三年(一八七〇)十一月十九日自今舊官人元諸大夫侍并元中大夫等位階

総而被廢。十一月二十八日依願東上。十一月伶員申し付けられる。

同四年(一八七二)九月十二日雅樂長助權助被廢更に式部寮江合併被仰

付。

同七年(一八七四)六月二十八日上等伶員申し付けられる。十二月十四日

歐洲樂傳習申し付けられる。

同八年(一八七五)三月十三日任少伶人。四月八日任權中伶人。

同十年(一八七七)十月二十八日除服出仕。十月三十一日式部寮中大伶人

以下被廢更に一等伶人以下被置。十一月一日任四等伶人。

同十一年(一八七八)八月二十九日任四等伶人。

同十四年(一八八一)二月十日文部省御用掛兼勤申し付けられる。オーケ

ストラ、内外音律、和声の研究。唱歌の選曲。音楽取調掛勤務申し付け

られる為手當金拾円給與。

同十五年(一八八二)九月十三日職務勉勵に付為手當金拾円給與。

同十六年(一八八三)三月十九日自今壹個月金拾五円給與。

同十七年(一八八四)九月二十日教員可相勤。十一月十四日任雅樂師。十

月二十九日祖先以來連綿樂道に従事に付一家保護のため毎年八拾五円下

賜。

同十八年(一八八五)六月一日東京女子師範學校御用掛兼勤申し付けられ

る。八月十七日職務勉勵に付為手當金拾円給與。九月七日兼東京師範學

校校申し付けられる。十月二十七日文部省御用掛差免。東京師範學校御

用掛兼勤申し付けられる。兼音楽取調所詰申し付けられる。

同十九年(一八八六)一月二十一日東京師範學校兼勤差免。音楽教授方囑

託される。兼音楽取調掛教授方囑託される。唱歌、オルガン、ピアノを

担当。六月二日兼任高等師範學校助教諭。叙判任官六等。年俸金百二十

円給與。

同二十年(一八八七)二月三日音楽取調掛教授方囑託を解かれる。東京高

等女學校兼務を免ぜられる。月俸金拾五円給與。

同二十三年(一八九〇)三月三十一日免兼高等師範學校助教諭。兼任女子

高等師範學校助教諭。叙判任官四等。月俸金拾五円給與。七月二十三日

補樂師兼伶人。月俸拾五円支給。

同二十五年(一八九二)二月十九日免兼官。兼任女子高等師範學校助教

諭。七月十二日兼官職務勉勵に付為慰勞金九拾円給與。十二月兼官職務

勉勵に付為慰勞金百四拾五円給與。

同二十六年(一八九三)四月十四日尋常師範學校尋常中學校高等女學校音

樂科教員たる事を免許される。五月三十一日職務勉勵に付為其賞金三拾

六円給與。免兼女子高等師範學校助教諭。當校生徒の授業を囑託され

る。壹個月手當金拾八円給與。

同二十七年(一八九四)二月七日日本校附属音楽學校の教務を囑託される。

三月三十一日教務囑託為手當金五拾五円給與。

同三十四年(一九〇一)六月二十七日叙勲八等授瑞宝章。

同三十五年(一九〇二)三月三十一日授業囑託を解かれる。四月八日遠山

御用掛所勞引籠中常官、周官御用掛兼務を命ぜられる。

同三十六年(一九〇三)十一月二十七日依願免本官并兼官。

この間明治十九年には神田裏猿楽町の尚綱小学校内で「唱歌會」を設立し、鳥居忱、上眞行、辻則承らとともに民間の音楽学校を始め、二十年設立の芝唱歌會(小山作之助主宰)と併立していた。奥好義は唱歌作曲者として又芸術的演奏家として当時の傑出した若い秀才であった。明治三十六年(一九〇三)から七年間山形県立酒田高等女学校で教鞭をとった。この間に山形県内の数校の校歌を作曲している。

酒田から帰京後は再び楽部にもどり、伶人としての職務の他、唱歌の作曲および音楽教育に従事した。

昭和八年(一九三三)三月九日没。

初期の唱歌作品『東亞音楽論叢』二一九〜二二〇頁)

祝日大祭日歌 天長節、黒川眞頼作詞、二十五年頃。『明治唱歌』(奥、大和田共編)——第一集より「紀元節」下田歌子作詞、〈勸學の歌〉高崎正風作詞、〈新年〉〈春風〉〈千里の友〉〈沖と磯〉以上大和田作詞、二十一年。第二集より「浦の夏」〈岩間の清水〉〈舟あそび〉〈夜半の曲〉以上大和田作詞、二十二年。第三集より「霞む夕日」〈皆物眼〉以上大和田作詞、〈海のあるる〉〈かたみの琴〉〈あられ〉以上「いさり火」より、二十二年。第四集より「未來の旅」〈墳墓の土地〉〈招ける春を〉以上大和田作詞、二十三年。第五集より「去年の友」〈故郷の文〉〈農夫の吟〉以上大和田作詞、二十三年。第六集より「汽車」〈ただ望〉〈星かと思えて〉〈あすの空〉以上大和田作詞、二十五年。『唱歌萃錦』(奥好義選)——第一集より「國の基」高崎正風作詞、〈御垣の内〉同(学習院生徒奉祝立皇太子式の歌)、〈教への庭〉下田歌子作詞、〈別れの歌〉加部殿夫作詞、〈流るる水〉下田歌子作詞、二十二年。第二集より「御代の秋」税所敦子作詞、二十三年。『儀式唱歌』(奥編)二十六年——「開校式」〈終業式〉以上本居豊頼作詞。『新編中學唱歌』(奥編)二十五年——「五月二十八日」阪正臣作詞、〈かざしの櫻〉下田歌子作詞、〈暮秋 税所敦子作詞、〈いざ進め〉中村秋香作詞。『歴史唱歌』(奥編)二十七年——「神の御告」〈巨勢山〉以上阪正臣作詞、〈關の白雪〉〈磯邊の波〉鳥山啓作詞、〈ゆかりの色〉菊間義清作詞。御製〈金剛石〉二

十六年。『新編軍歌集』(奥編)二十七年。小學唱歌(奥編)二十七年。軍國軍歌〈喇叭の響〉二十七年。〈金糸雀(かなりや)〉菊間義清作歌、二十七年。〈御垣の梅ヶ枝 御結婚滿二十五年御祝儀唱歌、二十七年。〈婦人從軍歌〉菊間義清作詞、二十七年七月。〈旭の御旗〉四竈納治作詞、二十七年。〈平壤の戦〉中村秋香作詞、大捷軍歌』第一より、二十七年。〈勇敢なる水兵〉佐々木信綱作詞、二十八年二月。〈皇統〉小中村義象作詞、『明治軍歌集』より、二十七年十一月。〈道の先〉『音楽雜誌』二十七年六月。〈町田大尉〉阪正臣作詞、大捷軍歌、二十七年。〈出陣の曲〉〈進軍の曲〉〈凱陣の曲〉以上大和田作詞、新編軍歌より。幼稚の曲(大和田・奥共編)二十一、二年——「朝の歌」〈曇らぬ日〉〈來鳴や鶯〉〈鴨ぞなく〉〈日は山に〉〈日本の名〉。〈鳥〉田邊友三郎作詞、『幼年唱歌』二編下より、三十四年。〈家の風〉佐々木信綱作詞、『國教唱歌集』より、三十年。

なお、奥はわが国で最初のピアノ教則本を編集したことでよく知られている。『洋琴教則本』寛裕舎、明治二十三年九月発行、はバイエルを軸に小学唱歌の編曲を挿入したもので、楽部では大正時代までこの教則本を使用していたそうである。

辻則承(つじのりつぐ) 東京府士族、旧樂人

安政三年(一八五六)四月一日大和國添上郡奈良御所馬場に於て生る。

明治三年(一八七〇年)十一月伶員申し付けられる。

同六年(一八七三)七月依願東上。

同七年(一八七四)六月二十八日上等伶員申し付けられる。七月十七日任

少伶人。十二月十四日歐洲樂傳習申し付けられる。

同八年(一八七五)四月八日任權中伶人。

同十年(一八七七)十一月一日一等伶員申し付けられる。

同十一年(一八七八)三月十四日神武天皇御例祭御陵へ参向申し付けられる。

八月二十九日任五等伶人(改正のため)。

同十二年(一八七九)五月二十二日洋琴傳習申し付けられる。